 Viet Nam	学校名：墨田区立緑小学校	● 実践教科等：図工
	氏名：柳澤 章人	● 時間数：6時間
	[担当教科：] 全科	● 対象生徒：第3学年及び特別支援学級児童
		● 対象人数：94人

1 単元名「色はいろいろ、いろいろな世界」

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・日本と外国とのつながり身近に感じ、そのイメージを自分なりに表現する。(多面的・総合的に考える力)
- ・自国や外国の文化・生活についての、深いつながりを知り尊重しようとする態度もつ。(つながりを尊重する態度)
- ・特別支援学級との交流を通し、共生社会実現への実感的理解をもつ。(つながりを尊重する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は、国際理解教育の題材を切り口に、共生社会の実現について実感的理解を深め、自分の考えを、色や形などに意味付けし、楽しみながら表現する学習である。

児童は、ベトナムの小学校美術の教科書を題材とし、幾何学模様やはっきりとした色使いを意識して創作活動に取り組むことで、文化の違い気づいていく。文化の違いへの気づきは、様々な国の共生という視点につながっていく。また、特別支援学級児童との交流学習に取り組むことで、共生社会の実現が身近なところにもあるという気づきにもつながると考えた。

実際の授業では、ベトナムの生活や産業・気候、日本による支援の実際などを知る活動から、外国と日本とのつながりについて自分の考えをもたせた。さらに、その考えを材料の色や形、組み合わせで、楽しみながら表現した。さらに、友達と一緒に交流しあうことで、発想や構想、創造的な技能を深め、作品に自分なりの意味を見つけられるように展開を工夫した。

(2)児童生徒観

第3学年の児童は、クレヨンや色鉛筆など、様々な彩色の用具に触れてきた。また、違う素材を重ねるなど、多様な表現方法について学習をしてきた。どの児童も、学習で示した視点を理解しながら、夢中になって描いたり作ったりする活動に取り組む様子が見られた。また、自分の好きな食べ物を想像して描いたり、絵に表したり、厚手の紙を切り分けて立体に組みなおしたりする学習では、用具の使い方を理解し、自分の作りたいものをイメージ通りに仕上げていく児童が多かった。

今回の学習では、国際理解教育を切り口に、共生社会の実現を意識した支援を行った。障害のある児童が、通常学級の児童に受け入れられともに尊重されるという共生の理念は、国際理解教育の視点と重なる部分が多い。通常学級、特別支援学級、双方の児童が互いに刺激を受けながら、自分なりの作品を完成させることを目指した。

5 評価規準

観点	造形に対する関心意欲態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
評価規準	外国と日本のつながりを意識しながら、形や色などに自分なりの意味をもたせて、楽しく表現できる。	色使いの違いや、国のつながりを考えて表し方を思いついている。	マジック・色鉛筆・お花紙・カラーモールなど、素材の使い方や色の組み合わせ方を工夫している。	作品の意図を自分なりに説明したり、友達の作品のよさや面白さを見つけたりする。
評価方法	ペアやグループでの話し合い活動の様子	ペアやグループでの話し合い作品	作品制作の様子	ペアやグループでの話し合い

6 単元の構成

時 限	学習のねらい	授業内容
1・2	外国へ目を向け、ベトナムと日本の文化の違いを感じる。	<p>1 ベトナムについて知ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地理的位置を確認し、ベトナムの風景を見る。 ○教師がベトナムでびっくりした体験を知る。 <p>第3位 バイクで登校の様子 第2位 道路でご飯を食べる 第1位 日本と違う色使い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○異なる文化(色使い)を知る。 ・ベトナムのぬりえ <p>2 ベトナムの文化を体験しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ベトナムの教科書をもとに、どんな色でぬれば、よいか考える。 <p><u>ベトナムの小学生になりきってぬってみよう</u></p> <p>3 色の組み合わせや色使いについて全体で交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○色使いや、色の組み合わせについて感想を伝える。 <p>4 次時の活動を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○作品に日本のイメージを付け加えることを伝え、日本と聞いて思いうかぶ名所・物・建物等を出し合う。四季(桜・花火・雪・風鈴など)を起草するなど視点を示す。
3・4	ベトナムと日本の深いつながりを知り、自分なりに、つながりのイメージを表現する。	<p>1 ベトナムと日本の深いつながりについて知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童にとって身近なものを紹介する。 <p>2 日本がベトナムに行っている支援について知り、外国と仲良くしていくために大切だと思うことを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○平和村・エコシティ・下水処理場の3グループに分かれ、それぞれの日本からの支援の実際について理解する。 <p><u>『ベトナムさんと日本さん』のいい関係を見つけよう</u></p> <p>3 日本の名所をお花紙で表し、前時の作品に重ねる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○重ね方、ずらし、貼る位置、色の重なりやつながりを考えて工夫して貼る。 <p>4 ベトナムと日本の伝統的や服装などを参考に、日本と外国の人物を厚紙で作成し『ベトナムさんと日本さん』として表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○厚紙に上半身のイラストを描くことを伝える。 ○カラーモールで手足を作り、自由に変形させてつながりを表現することを説明する。

5・6	<p>完成した、作品をもとに感想を交流する。</p>	<p>1 前時までの活動を振り返り、自分なりの作品を完成させる。 ○作品が完成したら、人の数を増やしていいことを伝える。</p> <p>2 完成した作品を友達と鑑賞し合う。 ○鑑賞の仕方を示す。 ①説明する側の視点 事実「つながりをどう自分なりに表現したか」 意見「作品を作って感じたこと」 ②コメントする側の視点 事実「つながりが表現されていると思うところ」 意見「作品全体を見て感じたこと」</p> <p>3 活動の振り返りをする。 ○自分の工夫や友達の作品の良さについて発表しワークシートに書く。</p>
-----	----------------------------	---

7 授業事例の紹介

小単元名【つながりを自分なりに表そう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月24日(火)第5・6限

(イ)実施会場 図工室

(ウ)本時の目標

ベトナムと日本の深いつながりを知り、つながりを自分なりに表現する。

(エ)指導のポイント

- ・児童が意識していない、ベトナムと日本の深いつながりを紹介し、自分の生活などと重ねて身近にとらえさせる。
- ・日本が行っている支援の実際を知り、外国を支援することについて、自分なりに大切だと思うことを考えられるようにする。
- ・自分なりの考えを、様々な素材でどう表すか、構想できるようにポイントを示す。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
20分	ベトナムと日本の深いつながりについて知る。	○ベトナムで売られているものや様々なデータを知る ・コンビニの様子 ・貿易の統計 ・焼き物の比較 ・ホイアンの日本人橋など ・ODAの拠出等 ○ベトナムと日本の関係について感想を交流する	一斉	○視覚的・体感的に理解できるように、パワーポイントや具体物を用いる。	
30分	日本からベトナムへの支援の概要を知る。	○全体を3グループに分け、平和村・エコシティ・下水処理場での支援をまとめたワークシートの内容をそれぞれ理解する。 ○グループ内で交流する。 ○全体で交流する。	グループ 一斉	○生活の様子、現地の方の思い、支援を受けたことでの変化についてまとめたパワーポイントを用いる。 ○グループに分かれて、それぞれの先生が説明する。	日本とベトナムとのつながりがりかいてきたか。 (発言・交流)

40分	日本とベトナムのつながりを表わす。	『ベトナムさんと日本人』のいい関係を見つけて貼ろう ○日本の名所をお花紙で表し、前時の作品に重ねる。 ○ベトナムと日本の伝統的や服装などを参考に、日本と外国の人物を厚紙で作成し『ベトナムさんと日本人』として表現する。	個人 ○重ね方、ずらし、貼る位置、色の重なりやつながりを考えて工夫して貼る。 ○厚紙に上半身のイラストを色鉛筆等で描き、カラーモールで手足を作り、自由に変形させてつながりを表現することを説明する。	つながりの様子表現できたか。(作品)
-----	-------------------	--	--	--------------------

(2) 授業の振り返り

本時は、1回目の学習をもとに、日本とベトナムのつながりを表現する2回目の学習であった。児童は、まず、日本とベトナムの意外なつながりについて、教師と一緒に学習した。教師海外研修の際に撮影した「コンビニで売られているもの」などの写真を見て、児童は、「日本と同じだ。」「似ている。」と発言をしていた。それを切り口に、自分の作品に、ベトナムとのつながりを表現することを伝えた。ちぎり絵の技法を活用し、和紙をちぎって、1回目に作った作品の上に、児童は「寿司」「富士山」「桜」など、日本を起草するテーマを、思い思いに作品に表現していた。

こちらが用意した教材や資料が、児童の興味関心を喚起するものなのか、また、国際理解教育の視点を醸成することにつながるのか、初めての試みであったが、児童は自分なりに、外国と日本との違いや似ているところに気付いていた。なにより、自由な発想で、外国とのつながりを表現しようという意欲が見られたことが、とてもうれしい時間になった。

(3) 使用教材

○ベトナムらしい色使いを学ぶ幾何学模様のぬり絵



ベトナムの国定教科書の中から教材を選んだ。

○ベトナムと日本の違いを感じる学習を展開するためのスライド



ベトナムの本屋さんで購入したぬり絵の本と現地の様子をとった写真

(4) 参考資料等

- ベトナムの国定教科書 (* 使用教材参照)
- ベトナムの塗り絵

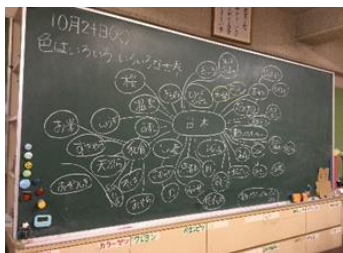
8 単元を通じた児童生徒の反応/変化

学習の第1回目は、ベトナムと日本との違いについて学習した。この中で、児童が最も興味を示したのが、ベトナムの本屋さんで購入したぬり絵である。特に、サッカーボールは、児童の身近なものであるだけに「えーなんで！」と、その違いに驚いていた。そこから同じくベトナムの本屋さんで購入した、美術の教科書を示し「ベトナムの小学生になりきって、色をぬってみよう」と投げかけた。今回、ベトナム独特の図柄を6種類用意したことで、児童は自分の塗りたい絵柄を選ぶことができ、製作への意欲が高まった。



←自分が選んだ下絵を、マジックで塗り分ける様子

第2回目では、1回目とは逆に、日本とベトナムの身近なつながりについて、教師海外研修で得た資料を用いて学習した。児童は、特に、ベトナムのコンビニの様子に興味をひかれたようだった。コンビニで売っているものを紹介すると、「日本とおなじだ」「日本と同じなのに高い(ベトナムドンで表記してあるため)」としきりに発言していた。これらの導入をもとに、図工の教師が「前回作ったベトナムのぬり絵に、日本をコラボさせてみよう」と投げかけ、日本を表現する展開となった。自分が作成したぬり絵の上に、日本を象徴するものを貼り絵として表現する。児童は「すし」「富士山」「桜」「紅葉」「スカイツリー」など思い思いのテーマを設定していた。



←日本を表現するために行ったウェビングの様子

第3回目は、「ベトナムさん」と「日本さん」の人形を作品の上に貼って完成することを伝えた。結果的には、この人形作りが児童にとって一番楽しい創作活動になった。日本がイメージできる人(着物・浴衣・相撲取りなど)とベトナムがイメージできる人(大量に購入したベトナムの絵葉書を参考にする)を、厚紙に上半身だけ色鉛筆で描く。そこに、手足をカラーモールで作成して貼る。それを、ぬり絵とお花紙で完成された作品の上に両面テープで張る。人形を貼った児童に、「なぜこのように貼ったの?」と聞いてみると「一緒に山を登って仲良くしている。」「スカイツリーを観光案内している。」など、自分なりに、ベトナムの人と日本の人が交流するストーリーを描いていた。作品が完成した後は、全員で鑑賞を行った。自分の作品のストーリーや色使いで工夫したことを友達に紹介すると、「仲が良くなっていいね。」「色使いがきれいだね。」など、国際理解教育の素地につながる発言が多く生まれた。

<p>日本さんが、ベトナムさんと一緒に富士山に手をつないでいる様子を表した作品。</p>	<p>日本の紅葉を、ベトナムさんと一緒に楽しんでいる様子を表した作品。</p>	<p>ベトナムさんの家族を日本さんの家族が、案内している様子を表した作品。</p>

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

本単元を構成するにあたり、教師海外研修に参加した個人の学びにとどめるのではなく、所属する学校の先生方や児童に広く還元できることも目指した。そのための手立ては4点である。

- ① 第3学年を対象学年とした授業。(自分が受け持っている特別支援学級ではなく、通常学級で授業展開する)
- ② 図工専科、第3学年、特別支援学級の先生方にチームティーチングの形態で参加してもらう。
- ③ 特別支援学級児童との交流学习を行う。
- ④ 授業実践を広く公開し、実践授業後に国際理解教育の研修会を設定する。

今回の授業実践では、これらが、効果的に児童の学びにつながっただけではなく、教師の研修の機会となった。学習計画を立てる段階では、協働して授業を開発できたことで「なぜ、このような展開なのか？」「子供にとっては、こちらの方が思考の流れに沿っているのではないか？」など、一人では気づけないことを出し合い、それを具現化できた。その際、JICA で頂いた資料をもとに、ミニ研修を行うなど、自分だけの学びではなく、多くの教師の学びに広げることができた。児童は、図工専科、担任教師だけの授業ではなく、国際理解教育の趣旨を理解した多くの教師が、協働で授業にあたることで意欲を高めていた。終末の交流の場面で、児童が国際理解教育の素地を醸成する発言をしていたのも、先生方と強力なチームティーチングの体制がとれたおかげである。

また、特別支援学級との交流学习では、通常学級の児童が、特別支援学級児童の話を手際よく聞く場面が見られた。特別支援学級の児童も通常学級の児童の制作の様子を見ることで、見通しが持て、また、同じ教材に取り組むことで、「楽しかった。」「とってもきれいにできた。」「また、やりたい。」といった思いをもった。共生社会の実現を目指し、実践に取り組んでいる特別支援学級の担任としては、とてもうれしい反応であった。

他にも、JICA の方に、国際理解教育の理解とその実践について教師の研修会を開いていただいた。自分の学びの機会となっただけでなく、校内に広く還元できたと考える。

一方で、課題も見られた。導入で使った資料の量が多すぎて、説明に時間を使いすぎてしまったことである。結果として、製作の時間が短くなり、第4回目を実施することになってしまった。他にも、第3学年という設定はどうかという疑問も反省の中で出された。第6学年の国際理解教育の内容や第5学年の貿易の学習と合わせて行うと効果的ではなかったかと思う。作品作りの面では、お花紙の扱いにもう一工夫必要であった。児童の中には、自分の描いた下絵の大部分にお花紙を貼ってしまう児童もいた。いくら透け感のあるお花紙といっても、大切にしていた色使いの違いが隠れてしまう。この辺りは、材料の量を制限する。広さを制限する。下絵を生かすように貼るよう声掛けをするなどの工夫が必要であった。

10 教師海外研修に参加して

10 日間の研修は、大きな刺激となるものとなった。まず、ベトナムに降り立ち、車上から町の様子を眺めた時の活気。路上でベトナム名物の「フォー」を朝売っている年配の女性。「食べないか」と話しかけてくる勢いに圧倒された。これからの日本の児童は、こういった、海外の人と共に世界を創っていく。



そう考えると、教師がまず、生き生きと、主体的・対話的に生きることが大切だと強く感じた。視察先で出会う方々は、自らの取り組みに、自信と誇りをもっていた。ベトナムの少数民族カトウ族のルオンさんは、カトウ族の生活様式や文化を紹介する開発観光事業のリーダーとして活躍されていた。そんなルオンさんに、困難に直面したときにどうするのか伺ったところ、

「まず、家族に相談します。あとは、副リーダーに相談します。そして、仲

間には、自分たちの活動は、価値があり面白いということを、理解してもらえるように説明します。

私たちの伝統が観光客の方に伝えられることは、誇らしいことだと伝えるようにしています。」

と話されていた。自分の活動や仕事に自信と誇りもち、仲間に価値を伝えることで、事業が発展していく。このことは、全世界すべてに共通する、リーダーの重要な資質であると感じた。

一方で、日本とベトナムの大きな違いも感じた。朝の路上では、たくさんの方が朝食をとっていた。ベトナムでは、朝と昼はお家でご飯を食べる習慣がない。だから、路上の屋台などで食べる。活気がある反面、衛生面での課題もある。JICA などの国際的な協力で、改善は進んでいるが、開発途上国の実態も垣間見えた。また、月の平均所得が 4 万円～5 万円という話も伺った。にもかかわらず、街には欧米や日本の高級車がたくさん走っている。日本以上の、大きな格差を感じた。このような違いの体感的な理解ができたことは、この研修に参加できた大きな意義となった。

今回の研修では、SDGs の 17 の視点やそれを具現化した、ベトナムでの取り組みを、生きた視点で学ぶことができた。教師が自分たちの仕事に自信と誇りを持って取り組むこと。真摯に専門性を高め、学んだことを児童に伝えていくことができるよう、この実践を今回だけの学びとするのではなく、今後も学び続けていくためのきっかけとしたい。